

JAELE Newsletter

上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

December 24, 2014

No. 12

校長の眼 ～つぶやき・うたかた～

連載 第12回 (最終回)

追憶と回想の日々～老人は過去に生きる～



苫小牧市立明野中学校
校長 佐々木郁夫
(平成4年度修了生)

平成21年から年2回の発行に合わせて、本稿を含め12回の連載コーナーをいただけてきました。ついに本号で拙稿は終焉の時を迎えます。「若者は未来に生き、老人は過去に生きる」と言われています。今回は私自身の教諭時代から現在に至るまでを振り返ります。

私が最初に勤務したのは穂別町立福山中学校でした。ここは山間へき地5級であり、北海道においては離島以外では稀有に等しい高度へき地でした。陸の孤島と呼ぶにふさわしく、最寄り駅から15km離れた地点にあり、公共の交通機関はなく、自家用車での移動以外に買い物を含めて出かけることは不可能でした。内陸に位置しているため、冬は積雪も多く気温は-25℃以下を記録しました。厳しい自然環境の中、私は新規学卒でしたが運転免許証と自分の車を所有していたので、外出するのに不都合はありませんでした。当時私と一緒に勤務していた3名の方々はこの地に就職してから運転免許を取得したので、不自由な生活を一定期間していました。さて、この学校は小学生3名と中学生4名からなる併置校で、教頭、事務職員、養護教諭は未配置でした。校長1名、小学校教諭1名、中学校教諭3名が校種にかかわらず児童生徒の授業をしました。私は英語以外に小学生の社会科と体育、中学生の国語、体育を担当しました。授業は一对一の学習をする学年がありました。30数名の学級であれば1単位時間に指名される回数は限られていますが、この場合は常時質問をされ、解答を要求されたので、当該生徒は大変な思いをしたことでしょう。まさに私と一对一で英語学習を3年間したT君は次から次へと課題を与えられ、厳しい叱正を受

け、時に涙しながらもよく頑張りました。私はずーっとT君に申し訳ないことをしたと思いつけていました。ところが、彼が成人してから偶然会う機会があったとき、私の所へ来てこう言いました。「先生のおかげで英語は高校へ入ってから 80 点以下をとることはありませんでした。どうもありがとうございました。」このとき、長い間私の心の中にあった贖罪の気持ちが安らぎに変わりました。T君、ありがとう。厳しく教えても生徒に分かった、できるという自信を持たせることの大切さを再認識しました。私のやり方が間違いではなかったと思いました。

このあと、壮瞥町立壮瞥中学校へ異動しました。横綱北の湖の生まれた町で、当時は引退前でしたので賜杯から遠ざかったころでした。ここの子どもたちは大変素直で保護者も協力的で、まだ 20 代の私を様々な面で温かく見守っていただきました。きれいな洞爺湖が印象的であり、楽しく心落ち着けゆったりとした時間を過ごすことができました。

その後、昭和 60 年から現在住居のある苫小牧市に勤務しました。苫小牧市は私が高等学校を卒業した地であり、友人が多数おり、両親も住む親しみのある所でした。勤務した苫小牧市立光洋中学校は 21 学級 900 名の生徒を抱えており、環境の変化に戸惑いながら 1 年おきに卒業生を 3 回送り出し、30 代中盤を迎え中堅教員に区分される経験と年代になっていました。ある時、どうしたことか平成元年度の文部省英語教育指導者講座に偶然参加の機会を得ました。この研修に参加して驚いたのは各県によっては受講希望者を対象にした選考試験があり、1 番と 2 番の英語教諭が選抜されて来るという話でした。47 都道府県と制令指定都市から 92 名の実力者が集結して研修が始まりました。講師陣は文部省教科調査官や英語教育界をリードする方々ばかりであり、高名な大学教授陣でした。朝はジャパントイムズ購読に始まり、つくばフォーマットという講師による講義、グループ討議、グループ発表が続きました。この形式で毎日、幅広く徹底して勉強をしました。若干体調を崩す人も出ましたが、私は 1 か月の研修を終えて苫小牧に戻ることができました。この期間、優秀な受講者に混じって劣等感に苛まれていた私に唯一の福音がありました。それは、私の提出したレポートが一番よい内容だったと当時横浜国立大教授の長谷川潔先生から言われたことでした。このときは天にも昇るほどの感動と喜びであり、講義終了後に先生の後を追ってお礼を言わせていただきました。部屋へ戻ってから一人で涙が出てきました。うれし涙を流すことは滅多にありませんが、このときがそうでした。この一つの自信が大修館の英語教育、研究社の現代英語教育への英文投稿へとつながりました。A の評点をもらえるのに、何年かかるのだろうかと考えながら後者の英作文添削道場については毎月欠かさず書き続けました。日本ハムファイターズの栗山英樹監督が「夢は正夢」と言ったことが起こりました。それは、上越で研修していた初年度ですから投稿開始後、2 年くらいして A が実現しました。元々文を書くのは和英問わず好きな方でしたので、ひたすら投稿をしていました。継続は力なりを実感することができました。そして、平成 2 年 7 月に北海道教育委員会の大学院派遣研修制度の選考を初めて受けました。筆記と面接があり、一度も書いたことのない論文でしたが、時間内で書き上げることができました。道教委の派遣候補者となり、8 月に上越教育大学での入試を受けました。この時に知り合ったのが飯島博之現埼玉県立大学教授と T さんでした。

いよいよ平成 3 年 4 月、家内と 4 歳息子、2 歳娘を連れて上越教育大学大学院学校教育研究科教科・領域教育専攻言語系（英語）コースでの生活が始まりました。果たして無事修了して北海道へ帰ることができるのか、不安以外の何ものもない中で入学式を終え、2 年間の派遣研修に突入しました。私たちの学年は 7 名で現職教員が 6 名いました。お互いに非常に仲がよく、意思の

疎通もよかったので勉強以外の分野でも交流がありました。夏休みに入る前、前後期の休み、年末の時期には必ず全員集合して賑々しく宴席を催しました。ほかにも 2DK の世帯棟の拙宅に来てもらって北海道から取り寄せたラーメンやホッケを食べながら楽しいひとときを過ごしました。レク活動も盛んに行われ、夏季テニスや冬季スキーが定番の催し物でした。現在都立高校の副校長をしている Tさんはスキー2級を取得するほど上達しました。また、休暇を利用してバリ島でスキューバの資格をとった Wさんがいました。夏休みに長野県の Nさんの好意で冠着山（通称姨捨山）で宿泊研修もしました。ここで誤解のないようにしていただくために、私たちがかなり一生懸命学習に励んでいたことについて触れます。初年度は学内で顔を合わせる機会が多く、お互いの近況を知ることができました。M1では所定の単位を取得することが中心でしたが、M2になると修士論文の完成に全てを投入しました。参考文献のコピーをたくさん取り、夏休みを過ぎるとかなり集中して論文作成を続けました。それでも M2の友人たちとは連絡を取り合い、近況を知らせ合っていました。したがって孤立無援になるとか苦境のまま追い込まれるといったことは起こりませんでした。私は平野絹枝先生の指導を受けており、追い込みの時期には研究室で長時間にわたる懇切丁寧な指導と助言をしていただきました。平野絹枝先生の親身のご指導によって M2の8月、伊香保温泉で関東甲信越英語教育学会の自由研究発表をすることができました。この勢いで修士論文と同時進行で同学会の研究紀要に投稿したところ、掲載となりました。掲載が決まった旨の文書を持って絹枝先生を大学構内にお伺いし、LL教室におられたので「先生、ありがとうございました」と報告したとき一言「グー！」とおっしゃいました。先生の満面の笑みが今でも目に浮かんできます。ひょうたんから出た駒はもう一つありました。当時の研究社『現代英語教育』で「英語教育をめぐる現代日本的諸問題」平成5年（1993年）5月号に拙論が掲載されました。私が上越を去る前に津田正編集長宛「現職教員の研修を考える」の素案を送ったところ、目に止まったことが幸いしました。何事も行動を起こさない限り陽の目は見ないことを知りました。

平成5年4月から苫小牧市立光洋中学校に復帰し、11年ぶりに1年生を担当しました。大学院での研修を終えて戻ってきた珍しさのせいか、地元の苫小牧民報と北海道新聞が取材に来ました。どちらも写真入りで紹介してくれました。前者は私が上越へ派遣される際も大きく取り上げており、そのときの写真は記事よりも大きかったと記憶しています。久しぶりに教室に戻ると居心地がよく、そして担任した1年6組の生徒はとても親しみのもてる素直ないい子ばかりでした。この学級が最後の担任となり、そのときの彼ら彼女らも今は34歳になりました。その翌年、教務主任の仕事をし、校長や教頭と学校経営の一翼を少し担う立場になりました。儀式的行事の進行では順番を間違えたり、結構な失敗をしました。苫小牧市内の教務担当者は高年齢層がほとんどであったため、不惑直前の私は若く異例な存在であったこともあり、厳しいお叱りを受けることなく1年間を務めました。

平成7年4月から北海道教育庁日高教育局生涯学習課義務教育指導班指導主事として勤務が始まりました。3月までの立場とは一変し、学校教育指導や各種研修事業の企画運営、様々な指導資料の作成をはじめ多岐にわたる仕事が押し寄せてきました。学校社会との決定的な違いは学校は鍋ぶた的であるのに対し、行政はラインとスタッフによる縦系列の指示命令で動きました。学校社会においては多数派を占めるのが教育職である校長、教頭、教諭たちですが、行政は私たち教育職が少数派であり、事務畑の方々の意見や意向に沿って業務が進んでいく場合が多いことに戸惑いを感じました。「指導主事は先生方の先生である」と言われ、難しいことをわかりやすく

話すのが指導主事だと肝に銘じて3年間を過ごしました。平成10年4月から胆振教育局生涯学習課義務教育指導班指導主事、さらに平成13年4月に釧路教育局生涯学習課義務教育指導班主査、平成15年4月に再度胆振教育局生涯学習課義務教育指導班主査を拝命し、9年間北海道教育委員会のお世話になりました。この間、平成12年3月31日、有珠山が噴火して当時の虻田町民は全員避難し、死傷者ゼロという出来事がありました。この時、幹線道路は閉鎖され虻田町内の小中学校のみならず役場機能は全て隣町の豊浦町に移転しました。4月に入り、教育局では学校の再開をすべく避難中の当該小中学校校長たちのいる豊浦町へ出向くことになりました。疲労と寝不足、心労もあり、どの校長たちも疲弊、憔悴していました。4月4日と記憶していますが、教育局の生涯学習課長を筆頭に学校再開へ向けて意思統一を図るため、私も同行者の末席にいました。もちろん、町教育委員会の管轄下にある学校ですので当該教委の協力を得て一刻も早く学校を再開することを考えました。実は虻田町内の小中学校の校舎は使用できませんでした。当たり前のことですが虻田町内や伊達市内の一部地域は、全住民が避難しており、児童生徒の所在すら明確にわからない中での学校再開でしたので、正直のところ私たちも五里霧中の部分がありました。この再開準備をする中で緊急事態が発生した場合、法律についても弾力的な解釈や運用ができることを知りました。当時、豊浦町と長万部町にあった避難所付近の豊浦小と豊浦中、長万部小と長万部中に虻田町内の児童生徒を入れて学習を再開することにしました。詳細な説明をすると紙面がまだまだ必要になるので、割愛します。とにかく4月17日に学校は再開しました。この時、子どもの所在を知らせてくれるようNHKテレビのテロップがありがたかったです。全道に散らばって避難していた家庭もあったので、テレビの力を知りました。NTT docomoも被災校の校長にケータイを無償で提供しました。多くの方々の献身的な尽力と温かい気持ちに支えられました。それらの中でも学校の先生方は粉骨砕身、誠心誠意一人一人の子どもたちのために避難所を自主的に廻って安否を確認したり、相談事にのるなど真剣そのもの一生懸命取り組んでいました。あの非常時に教育行政の末端に身を置いた者として、我が国の教育は捨てたものではない、学校の先生たちは自分のことよりも子どものことを第一に考えている、本当に立派だと実感しました。この時の経験によって、その後の私が判断し行動する上で、役立ったことは言うまでもありません。

平成13年と14年は釧路教育局に勤務しましたが、この時に起こった大事件が大阪教育大学附属池田小学校での殺傷事件でした。学校の管理責任が問われ、どの学校も出入り口を厳重にして部外者の侵入を防ぐようになりました。安全と安心な場所であるはずの学校内で尊い子どもの命が奪われる残虐非道な蛮行が白昼公然と行われたことに驚愕したのを思い出します。地域安全マップの作成、地域保護者によるパトロール、不審者対策は現在でも全国各地で取り組まれています。平成15年は二度目の胆振教育局勤務であり、管内校長会議で私が説明するコーナーがあったので、冒頭「皆さん、久しぶりです。釧路から来たので話が単調になるかもしれません。また、失言があるのでそのときはご容赦願います」と言ったところ、なかなかの反響がありました。単調は丹頂、湿原は失言を意味し、どちらも釧路地方の風物にちなんだものでした。

そして、平成16年から家族と両親の住む苫小牧市に戻り開成中学校の校長として勤務が始まりました。釧路と室蘭では単身生活をしてきたため、何となく私の居場所がしっくりこない状態がありました。家族もふだんいない人物が生活の場にいるわけで、お互いに気を遣っていたような気がします。各学年2学級の小さな学校でしたが、非常に落ち着いた雰囲気です。進学状況もほぼ第一志望がかなえられていました。平成19年から沼ノ端中学校に異動しました。この学校は人口急

増地域にあり、この年校区内に新たな小学校が分離開校したばかりでした。そのため、平成 20 年は 3 つの小学校から 200 名を超える新入生を迎え、20 学級の規模にふくれあがりました。元々が 10 学級以下程度の規模で推移した学校のため、校舎の教室は使いきり、プレハブ校舎に 6 教室を設置してました。生徒数が多いと何をやっても活気があり、部活動も元気にあふれていました。幸い、平成 21 年に新設校ができたので、15 学級の少し余裕がある校舎に戻りました。それでもプレハブ校舎を使っていました。平成 22 年に啓明中学校へ異動しました。この学校はかつて最大規模 31 学級 1,100 名を超えていましたが、生徒数は往時の 3 分の 1 程度に減り、沼ノ端中の過密校舎と比べるとゆったりと広々として大きな校舎でした。平成 25 年、現在の明野中学校に異動しました。いよいよ教職生活の終わりが近付いてきました。学校規模は小さく、1, 3 年が各 3 学級、2 年が 2 学級の 8 学級 242 名です。開校が平成 4 年のため、まだ我が国の経済状態がよい方だったせいか、耐震構造に優れ、寒い冬も暖房設備が完備しています。ありがたいことに過去 3 校の校長室は手狭で日当たりが悪く寒かったのに対し、今は教室と同じ広さの校長室に置いてもらっています。さて、明野中学校の全国学力・学習状況調査の結果は毎年全国の下位に甘んじている北海道を尻目に、昨年度は国語 AB・数学 AB とともに全国平均を上回りました。今年度も数学 AB と国語 A は全国平均を超えました。生徒の生活態度は非常によく、授業に参加する姿勢は極めて立派です。見るからにおかしい姿形の生徒は一人もいません。他校から転勤してきた先生たちがびっくりするほどです。6 月の体育大会、9 月の学校祭、3 月の卒業生を送る会では、各学級、学年が感動的な場面を見せます。魅せますといった方が適切かもしれません。体育大会ではきびきびと動き、全員が真剣に競技に参加します。苫小牧市の中学校の体育大会は小学校の運動会的な要素が強く、お昼は生徒と一緒に食べることもあり、当日は保護者、家族が大挙して応援に来ます。9 月の学校祭では合唱コンクールが最大の盛り上がりを見せます。この日のためにどの学級も目標を設定して計画に従って準備と練習を重ねます。さすがに 3 年生の発表は最高学年にふさわしく、1, 2 年生の手本となる見事な歌声を響かせます。例年 3 年生の最優秀学級が苫小牧市民合唱祭の中学生の部に出場します。今年は 3 年 3 組が市民会館のステージに立ちました。ピアノ伴奏と指揮者を入れて 28 名しかいないにもかかわらず、40 名近くで参加している学校よりも場内に合唱が響き渡るのは圧巻でした。私が一番うれしかったのは、他校には欠席者がおり、多い学校では 7 名欠席だったのに対し、明野中 3 年 3 組は学級の成員が一人残らず参加したことです。健康面を含めて全員が揃うのは至難ですが、本校の生徒は全員がステージ上で合唱を披露しました。ひいき目と言われるでしょうが、もちろんステージマナーが一番よかったです。あえて一番と言ったのは、本校に着任してから「明野中学校を苫小牧市内のナンバーワンスクールにする」と言い続けてきたからです。このナンバーワンの意味は学習面だけでなく生活面を含めて、やっぱり明野中学校の生徒は立派だ、他校とは断然違うという事実を堂々と示すことです。昨年度の卒業生（現高校 1 年生）が「校長先生へ」とメッセージを送ってくれました。以下に原文のまま紹介します。

- ・先生がいらっしゃって生徒は「ナンバーワンスクール」を目指し、行事にも活気が生まれてきました。この一年で大きくナンバーワンスクールに近づけたのではと思います。
- ・この明野中学校が苫小牧市で No.1 school となることを心から願っております。
- ・僕たちが卒業しても No.1 スクールで一生涯生きてください。

自画自賛と笑われますが、今や着々と頂上へ向かっている手応えを感じています。今年度の入学

式では、新入学生徒はもちろんですが、2, 3 年生が全員出席していました。校長 11 年目の最後の最後になる入学式に一人残らず全員集まったことは感慨深く、また一つ素敵な思い出ができました。

私は平成 26 年 3 月 31 日をもって現職を退きますが、第二の人生であるとか、全く考えていません。私の好きな言葉に「60 過ぎればただの人」があります。今は人生 90 年などと言っていますが、多くの人々が 60 歳で一線を退きます。世の中には一生現役のままバリバリ頑張る人がいます。それはその人の生き方ですので、大いに活躍すればよいのです。超高齢社会に突入し、団塊世代のみなさんのみならず、シニアの面々が第二の人生を謳歌する様子が話題になり、新聞や雑誌、テレビ等で報道されています。街中の高齢者を見るとずいぶん元気でさっそうと闊歩あるいは軽快に走っている姿を見かけます。皮肉なことに、健康によいとされるジョギングの提唱者 Jim Fixx は自らもジョギングの実践を続けていましたが、日課としていたジョギング中、心筋梗塞を起こして 52 歳で急死しました。あえて水を差しますが、どんなにアンチエイジングに血道を上げ、スポーツジムに通い身体を鍛え、健康増進に役立つ食品やサプリメントを摂取したところで、着実に老化は進行します。好むと好まざるとにかかわらず、加齢とともに身体の自由は利かなくなり、動作は緩慢に、目も見えにくく、耳も聞こえなくなります。誰もが日野原重明先生や三浦雄一郎氏のようなウルトラスーパー老人にはなり得ません。女性もあんなに美しかったはずの方々が驚異的な変貌を遂げます。テレビで往年の美女たちが年齢相応の姿になっているのを見ると安らぎを覚えます。逆に年齢を全く感じさせない外見を保っている女性を見ると様々な懐疑心が湧いてきます。私は隠遁者とはいかないまでも、これまでどおり無理をせず、身の程をわきまえ「群れず」「媚びず」「威張らず」のまま晩年を閉じる予定です。今さら気負うことなく、私本来の地味に静かにひっそりと余生を送ります。少なくとも「元、何をしていた」ということは一切捨てて、逆に世間から「えっ、そんなことをしていたの」と思ってもらえるような生き方に徹します。これは校長になる前から決めていたことです。

願わくは心身共に健康でいたいですが、半身不随、認知症の要介護老人となり、自分の意思で身を処することができなくなる可能性があります。私の無事これ名馬がいつまで続くか。それは神のみが知っています。

最後になりましたが、不徳を重ね、各方面に多大な迷惑と心配をかけてきたことをお詫びします。これまで窮地に陥った際、多くの方々に様々な場面で助けていただきました。何の才能も優れた技能もない私がこうして退職できることは望外の喜びであり、感謝の念でいっぱいです。よい生徒、保護者に恵まれたことにお礼を言いたいです。

なお、今号をもって拙稿の本紙掲載は完結とさせていただきます。平成 21 年 7 月の創刊以来 5 年半、12 回に及ぶ本連載を提供して下さった埼玉県立大学教授飯島博之先生をはじめ、本稿の読者である諸姉諸兄どうもありがとうございました。皆さんお元気で、さようなら。

強がり

大学院 1 年 言語系コース(英語)

加藤 絵理

「どうして大学院に進学するの？進学して意味があるの？」。そのような質問を何度投げかけられたかわかりません。学部時代の友人の多くは、採用の形は様々ですが現場に出る道を選びました。そのような中、私が大学院進学を選んだ理由は“強がり”、その一言に尽きると思います。小学生のころから先生になることを夢見ていた私にとって、教員採用試験で不合格の烙印を押された当時、「受かった人よりもいい先生になってやる」という意地で自分を奮い立たせるしか折れそうな心を保つ方法がなかったのです。だから、誰にそう尋ねられても「もっと力をつけてから現場に出たいから」とか「これからは大学院を出ていて損することはないから」というように適当に答えていました。「誰よりもいい先生になりたい」。このような思いを抱き、大学院進学を決意しました。まだ数か月しか大学院生活は経っていませんが、数ヶ月前の私にあった「いい先生になりたい」という思いは形を変えつつあります。そのきっかけとなったのは人との関わりでした。

大学院では様々な人が勉強しています。それは年齢や性別だけでなく、性格や経歴など本当に様々です。私は英語コースに在籍しながら小学校教諭を志していることもあり、他コースの授業を多く取るため、本当に多くの人と接する機会があります。私の受けている授業では、どの授業でも知識を得ることだけでなく、積極的な意見交換が求められます。様々な背景や考えを持つ人が本気で語り合い、意見を交換する場に身を置くことで自分の視野の狭さや考えの甘さに気付かされます。そうすることで新たな気付きが生まれ、考えを改めたり、深めたりすることができます。意見交換を重ねる中で私の「いい先生になりたい」という思いは、子どもに好かれたいという思いと、子どもの学力を伸ばすために自分の授業力をつけたいという視野の狭いもので、自分自身のことで精いっぱいになっていたということに気付きました。子どもの思いや成長に寄り添うという視点を見失っていたのです。それに気付いた今、私がそれを生かしていこうとしている内の1つにゼミの活動があります。私の所属している小学校英語分野のゼミでは附属小学校へのティーム・ティーチングによる出張授業が後期に行われます。30分の授業を作るために、リーダーを中心に何度も話し合いを重ね、よりよい授業を目指します。子どもの意欲や能力のバランスなど様々な要素を考えて教材作成から話し方、活動内容など細かいところまでこだわり時間をかけますが、うまくいかないこともあります。しかし、授業のために同じ学年を担当するメンバーと話し合いや反省会をしたり、授業を参観してもらった人からアドバイスをもらったりすることでさらに多くの視点から子どもや授業を見ることができ、次につなげることができます。現場に出たら時間も余裕もないと思いますのでこんなことはできないと思います。だから大学院だからこそできるこのような練り上げの場を大切にしていきたいと思います。

強がりですごした大学院生活ですが、心の底から尊敬できる先生・未熟な私を支えてくださり相談に乗ってくださる先輩・互いに高めあえる意識の高い同輩に出逢い、たくさんのプラスの影響を受け、毎日が充実しています。大学院に進学できることは当たり前のことではありません。普通なら社会に出るところを、私の思いを大切に、大学院進学という貴重な機会を与えてくれた両親にも感謝しなくてはなりません。これからの大学院生活を経てまた変わるのかもしれませんが、私の今一番強い思いは「子どもの思いや成長に寄り添える、思いやりのあふれる教師にな

りたい」ということです。これは強がりでも何でもなく、大学院生活を経て得た今の私の素直な気持ちです。誰かと比較して自分と優劣をつけるのではなく、目の前の子どもを大切にできる教師になりたいのです。そのために、周りへの感謝を忘れず、全力で残りの大学院生活を過ごし、教師を志す身として人間的にも成長していけるよう努力したいと思います。

森と水と人情と

大学院 1 年 言語系コース(英語)
新井裕史

上越教育大学から西に 40km ほど。糸魚川市街で姫川が日本海へと流入する。この川は長野県白馬村地内で最初の一滴が零れ落ち、途中白馬連峰からやってくる豊富な支流群と合流して水勢を増していく。北アルプスに磨かれた水は夏でも刺すように冷たく、透明度が抜群である。水質については折り紙つきで、国交省発表の水質ランキングで 1999 年以降 4 度も日本一を獲得しているのである。

今年の春から上越に越してきたが、姫川の存在は以前から知っていた。というのも、私は大の溪流釣りファンで、姫川では美しい魚が釣れるという話を耳にしていたからである。5 月に訪れたときは雪融けによる増水で釣りにならず、初めて竿を出したのは 6 月のことだった。姫川でのメインターゲットは、河川の上流域に生息し冷水を好むヤマメとイワナである。一般的にこれらの魚は警戒心が強く、釣るのが難しい魚とされているが、姫川の魚たちは実におおらかだ。川を横切って大きな音や波しぶきを立てても、少し待っているとまるで自分の家に帰るかのよう、泳いでいた流れへと戻ってくる。

その後、数回足を運んだが飽きない程度に魚は釣れた。魚の反応に乏しいときにふと顔を上げると、山々が描く緑のコントラストが素晴らしい。どこまでも電線などの人工物が無い山なみの中へと吸い込まれそうになる。自分の立っている足元に目を落とすと綺麗な水に磨かれた石が輝く。谷の深いポイントへ入れば、人に会うことは滅多にない。聞こえるのは鳥のさえずりと瀬音のみ。静かで、どこか温かくて、穏やかな時間が流れる。この感動をひとり占めしているのはもったいない気がしたので、夏休みにはゼミの先輩を誘ってヤマメ釣りに行ったり、登山をしたりした。その際にはツキノワグマやニホンカモシカなど様々な動物にも遭遇した。身近なところに野生が息づいていることを実感する。

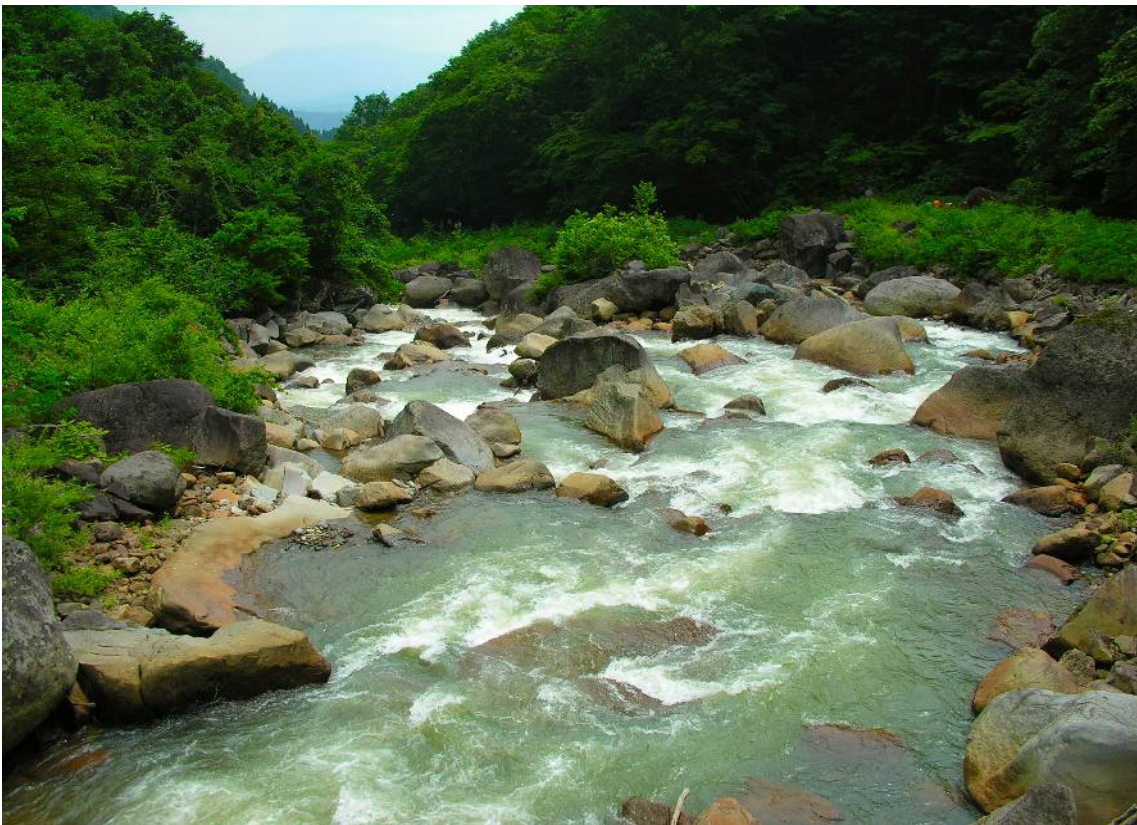
大自然の豊かさも去ることながら、もう 1 つ私を惹きつけているものがある。それは姫川流域に住む人々の気質である。釣りをしていると土手の上や橋などから声を掛けてくれる人が他河川に比べて圧倒的に多いのだ。川へと続く田んぼのあぜ道を歩いているときに、農作業のおばあちゃんに「釣れたかあ〜？」などと声を掛けられ、鋭気を養うようにと桃を手渡されたときには、涙が出るほど嬉しかった。自分の世界にどっぷりと入り込み、魚との駆け引きに集中することはもちろん楽しい。しかし、そればかりでは飽きが来てしまう。現地の人々と談笑し、美味しいものをいただき、ゆっくりとした時間の流れを感じるのも私にとっては釣りの楽しみなのだ。

去る 11 月 22 日、長野県北部地震が起こった。震源地はこれまで触れてきた白馬村、まさにそ

の場所である。多くの家屋が倒壊したが、発生時刻が 22 時を回っていたために真っ暗闇のなかでの救助活動となった。また、気温も氷点下まで冷え込み、家屋の下敷きになってしまった方々にとっては辛い状況だったに違いない。しかし、大きな震災だったにもかかわらず、犠牲者が一人も出なかったのだ。この一報を目にしたとき、私は思った。他所から釣りに来た人間に対して、あれだけ優しく接してくれる人たちだから、この結果は必然かもしれない、と。地域のつながりの強さと、人情あふれる救助の結晶なのではないだろうか。本原稿を執筆している 12 月 20 日現在、土砂崩れによって寸断された大糸線は復旧し、仮設住宅の整備も進んでいるということだが、現地は豪雪地帯であるため、厳しい冬を迎えることは想像に難くない。一日も早く元の生活が取り戻されるよう祈るばかりである。

上越も 12 月としては過去に例を見ないような大雪になっているとのことだ。雪国で初めて冬を過ごす私にとっては、衝撃的な高さの雪の壁ができあがっている。外出することもままならず、厳しい季節だ。しかし、学校と家との往復以外することもないため、誘惑を断ち切るには最高の環境とも言える。ここで学問に集中し、来年もまた素晴らしい自然と温かい人たちのところへ出掛ける時間を確保しよう。

さあ、勉強だ！



2年間

大学院 2年 言語系コース(英語)

藤井 佑輔

小学校の教員を志して大学院に入学し、間もなく2年が過ぎようとしている。教職に関する知識もほとんどなく朝から夜まで授業や課題に追われた一年目、教育実習という大きな成長の機会を得た2年目。ここまで大学院生活を駆け抜け、多くの経験を重ねるうちに、成長を感じることも増えてきた。

そもそも大学院に入学し、小学校教員を目指すことを決めた理由は大学時代にある。大学院に入学する以前は、人文学部で英語の勉強をしながら中・高の英語の免許を取得した。教育実習は中学校で行ったのだが、同じ指導案を用いて複数の教室で授業を行ったため、指導案にかかる時間や教材作成にかかる時間も少なく済み、あまり苦勞がなかった。その一方で授業を行っても手ごたえがなく、また授業が終わるとその教室を出ていき担任のクラスであっても関わりが少なくという専科のシステムをどことなく寂しく感じた。そんなとき、生徒と話していると英語嫌いが多くいることに気がついた。中学校に入学し、突然多くの単語を覚えさせられ、文法も学ばなければならないという英語科の特徴が生徒を苦しめているのだと感じ、小学校で導入されている外国語活動で中学校への英語に対する抵抗感を軽減できないかと考えた。もともと小学校にも関心があり、子どもが英語を好きになれる教師になりたいと考えたことがきっかけとなり、現在大学院で小学校教員を目指し勉強している。

中学校・高校教員と小学校教員の大きな違いは全科を教えるかどうかであると思う。そのため、大学院に入学した1年目は各教科の指導法やブリッジ科目に追われていた。教科の内容で忘れてしまっていることも多く、また自分が小学校で教わったこと以外の内容も増えており、多くのことを記憶しなければならず、努力を要した。また、関心をもっている小学校外国語活動に関してもゼミを中心として多くの知識を得た。入学当初は論文に書かれている言葉が全く理解できず苦しんでいたが、時間と共に理解が深まった。その結果、現在の外国語活動に関する課題それぞれに自分の意見を持ち、それを議論することができるようになっていった。

2年目の夏には教育実習を経験し、多くの足りないものに気づかされた。授業で発問が曖昧で伝わらなかつたり、授業の組み立て方が上手くなく教えた内容が子供に理解できなかったように感じたりと悔しさばかりを感じていた。大学時代の実習では生徒が言いたいことを察してくれたために授業が成立していたのだと感じた。そのため、これまでの自分の教え方を変えることが必要だと感じ、実習期間中は理解しやすい授業を作ろうと毎日入念に準備をして臨んだ。授業を1つ終える毎に反省を繰り返し、改良し続け、実習の後半の授業では上手くいったと感じることもあった。上手く伝えることができ、子どもが分かったという顔をした時が実習で最も嬉しかった瞬間である。この実習を経てますます小学校教員になるという意志が強まったと感じている。

2年目が終わり3年目になると、採用試験・修士論文が待っている。この大学院に入学して自分が得たものを発揮する場面だ。子どもが英語を好きになれる教員になるため、残りの期間でより多くのことを吸収しながら、自らの力を高めていきたい。

原稿と感想・ご意見の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集しております。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題、過去の掲載記事に関する感想など、お好きなトピックで原稿をお寄せ下さい（飯島博之：e-mail: ijjima-hiroyuki@spu.ac.jp）。

編集後記

佐々木郁夫校長の連載「校長の眼 ～つぶやき・うたかた～」は本号が最終回となります。佐々木校長ご自身が文章中で述べられているとおり、今年度で定年退職を迎えられることに合わせ、佐々木先生の連載も終了となります。

20年以上前のその日、上越市は猛烈なフェーン現象で熱風が吹いていました。大学院受験のその日、会場で知り合い、受験後に春日山に共に登ったお二人の先生のうちの一人が北海道ご出身の佐々木先生でした。2年間の院生生活の間、コース長の佐々木先生が自主的に発行し続けた「英語科院生通信」は単調になりがちな院生生活に多くの話題を提供してくれましたが、今も私の書齋に保存してあります。私が JAELEN の編集を任された時、まず、佐々木先生に電話をして連載をお願いしました。この人に書いてほしいとずっと思っていたからです。長期の連載、本当にありがとうございました。編集担当者として、また、友人として深く感謝申し上げます。

さて、次号からは清泉女学院短期大学国際コミュニケーション科教授の中村洋一先生が新たな連載をスタートしてくださる予定になっています。中村先生は項目応答理論に関する著作もあり、テストングの専門家としてご存じの方も多いかもかもしれませんが、上越英語教育学会の設立に大きな貢献をされた行動力抜群の先生です。県立高校教諭としての経験に加え、多趣味で人生経験も豊かな方ですので、何を書いて下さるのか今から楽しみです。佐々木先生同様、院生当時から私が「有意差 (**)」を感じた方の御一人です。 (編集委員 H.I.)



2014年12月24日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）
